

マーシャルにおける経済学者の 旧世代と新世代

The Old Generation of Economist and the New in Marshall

西 沢 保

The paper aims to show a characteristic feature of Marshall's economics as 'plutology' by examining Marshall's history of economics or how Marshall thought of the old generation of economists and the new. While he was critical to Ricardo's views to regard man as 'a constant quantity', Marshall rehabilitated Ricardo's theory of cost of production and evaluated a study of human efforts and activities, as opposed to wants. Then the paper discusses Marshall's ideas of progress and organic growth as the basis of his economics, focusing on wealth and life, work and life, morals, education and capabilities. It shows the importance of human elements in Marshall's economics.

Tamotsu Nishizawa

JEL : B13, B15

キーワード : A. マーシャル, W.S. ジェヴォンズ, D. リカード, 進歩, 有機的成長, 富と生

Keywords : A. Marshall, W.S. Jevons, D. Ricardo, progress, organic growth, wealth and life

1. はじめに

19世紀末葉、とくに1880年代において「社会問題」「貧困問題」に関する限り、イギリスの経済学者は政治的に「プログレッシブ」(progressive)であった。パンフレット『ロンドンの見捨てられた人々の悲痛な叫び』(*Bitter Cry of Outcast London*, 1883)も多く出て、後にホブソンも述べたように、「社会的病苦としての貧困の認識は、1880年代の発見として広くイギリス人の精神を

襲った」(Hobson 1929, xi)。1885 年 1 月には、マーシャルやフォクスウェルも参加して、「誰もが物質的安楽と精神的文化の公正な配分を享受でき、威厳ある生活と健全な生活を営めるようにする最善の手段は何か？」をめぐって「産業報酬会議」(Industrial Remuneration Conference)が開かれた。マーシャルはこの会議での発言を次のように結んだ。「強力な社会主義に対する不信はいかに大きくても、社会の見捨てられた人々を減らし、妥当な所得を得て生活の機会をもち、高潔な生活をしようとする人々を増やすことに時間と財を使わないで安穩としていることはできない」(Marshall 1885a, 66)。「労働の要求」シリーズの一冊として出版されたフォクスウェルの『雇用の不規則性と物価の変動』も、もとはこの会議の所産であった(西沢 2007, 413-5 参照)。

1882 年にジェヴォンズは『国家の労働階級に対する関係』を遺して 46 歳の若さで亡くなり、1883 年にはオクスフォードの「熱情的社会改良家」トインビーが 30 歳の若さで急逝し、その後マーシャルがブリストルから移籍した。1884 年にフォクスウェルがケンブリッジの大学公開講座の一環でヨークシャーの労働者階級に行った講義シラバスをマーシャルに送った礼状に、マーシャルは次のように書いた。「もちろん私は、レッセ・フェールの問題についてさえも、経済学者の旧派と新派の断絶について貴兄が言うことを和らげなければいけません。しかし、それは措いて、心から同意します」(Marshall to Foxwell, 10 March 1884: Whitaker ed. I, 172)。マーシャルは経済学者の「旧世代」と「新世代」という言い方を好んでしたが、フォクスウェルやジェヴォンズのような両者の単純で明快な「断絶」・「革命」というよりも、「連続性」を見ようとするのが基調であり、「真綿でくるむような言い方」(Keynes 1924, 131: 訳 176) もしばしばであった。

マーシャルは 1885 年 2 月にケンブリッジの経済学教授就任講演で「経済学の現状」について語り、新世代の経済学者がその方向を転換したことは知られているが、転換の性質について大きな誤解があるとしておよそ次のように述べている。

19 世紀初期にイギリス経済思想の基調を定めた人々は事実の研究を怠った

理論家であり、それがとりわけイギリスの欠陥であると一般に言われているが、それには根拠がない。彼らの書いた経済史は、少なくともこれまでの如何なる述作にも匹敵するものである。彼らは統計の収集、驚くべきシリーズの議会調書を用い、こうしたことは他のあらゆる国の模範となり、多くの優れた思想をもってドイツ歴史学派を刺激してきた。

経済学の見方について現世代の経済学者によって行われた変化は、帰納法をもって演繹法を補充し指導することの重要性を発見したことにあるのではない。それは、人間自身が大いに環境の産物であり、環境と共に変化するものであるということの発見によるものである。この発見の重要性が強調されるのは、近年になされた知識と真摯の増大、人間性が深く急速に変化しているという事実によるのである (Marshall 1885c, 153-4: 訳 179-80)。

ここでの力点は、歴史的方法とか理論の革新とかでもなく、人間性の問題であり、マーシャルには、歴史的に進化する人間性・倫理の形態、人間の良き生、経済・社会・人間の進歩 progress を追究する強固な姿勢があった。「人間の幸福と良き生(活)の機会が、多分にそれによって決まる日常業務の形態と原理を科学的な公平さで研究すること」が彼の職業であった (Keynes 1924: 訳 231)。「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である」、という『経済学原理』冒頭の一節はその現れであろう。『原理』第1編は、福田徳三によれば、「生を厚くする」「厚生経済学の大宣言とも見るべきもの」であった (福田 第5集、275、295)¹⁾。あるいは上田辰之助が言うように、自由主義経済学への反抗として台頭してきた経済学の倫理化、社会化、あるいは厚生化(人

1) 『厚生経済研究』(1930年)を遺した福田徳三はマーシャルを強く讃えた。経済学は「到富の方法を講究するものにあらず、社会を構成するすべての階級にその精神的発達の物質的基礎を充実せしむること」としたのは、マーシャルが最も進歩的な理由であった。「経済学は人間と富との関係を研究するものなりとマーシャルの説くは、両端を取め得てよくその真正の性質を尽くしたり。しかしてその関係は単に富の多少をいうにあらず、人間に他のより高き発達・より貴き活動を得せしめんがために必要なる物質的基礎が均等に与えられあるや否やを意味すとしたる.... 新派といい歴史派といい倫理派というも、その根本の思想は決してこれ以外に出でず、現今斯学の最も高き立場を示して余蘊なし」(福田 第1集、24-25)。

間化) は時代の著しい傾向であり、「経済学をもって日々の生活における人間の研究となす所のマーシャルの定義はひろく人口に膾炙して」いた (上田 著作集 2、234)。

2. マーシャルの経済学史

マーシャルのリカード評 (1) 人間は不変量でなく大いに改善可能性がある

先に引用した「経済学の現状」の同じ個所でマーシャルはリカードの Semitic origin について言う。「過度に抽象的思考に耽る傾向について、非難があたっているとすれば、自信に満ちた一天才の影響によるもので、その天才はイギリス人でなく、イギリスの思想傾向とほとんど何の共通点もない人であった。リカードの思想の短所と長所は彼のセミティックの血統に起源をたどることができ、イギリスの経済学者で彼と似た思考の持ち主はいない」(Marshall 1885c, 153: 訳 179)。

同様のことは『経済学原理』の付論 B「経済学の発達」でも言われており、マーシャルはこの点をバジヨットに負っているようである。リカードが「帰納をきらい抽象的な推論を喜びとしているのは、イギリスで受けた教育に由来するものではなく、バジヨットも指摘したように、Semitic origin によるもの」であった (Marshall 1961a、761: 訳 I、172)。マーシャルはバジヨットを高く評価していたようで、「イギリス経済学の基本公準」(1876 年)を「経済理論史の画期的な著作」と考えて、ケンブリッジの学生のために編集・校訂して 1885 年に出版した。その「序」で、リカードの推論の仕方が実際にもつ意味をバジヨットほど適切に示せる人はいないと書いている (Marshall 1885d)。

マーシャルは「経済学の現状」でいわく。「19 世紀初頭におけるイギリス経済学者の大きな欠陥は、彼らが歴史と統計を無視したことでなく、リカードとその学徒が大いなる一群の事実、および今日第一に重要と思われる事実の研究方法を等閑に付したことである。彼らは人間を不変量 (constant quantity) とみなし、その変化の研究にほとんど力を弄しなかった。彼らが知っているのは主にシティの人間であり、他のイギリス人もそれに非常に近いと暗黙の裡に

想定している (Marshall 1885c, 154-5、訳 181-2)。

「経済学の発達」でもマーシャルはリカードと彼の追隨者に批判的であった。議論の単純化のために、彼らはしばしば「人間を不変のもののように」みなし、人間の多様性を研究するために十分な労をとろうとしなかった。「イギリスの法律家がイギリスの民法をインド人に押しつけたのと同じような知的習癖によって、イギリスの経済学者は暗黙のうちに世界はシティの人間によって形成されているという想定にたつて理論を展開した。²⁾」彼ら旧派の経済学者の最大の欠陥は、産業・勤労の慣習や制度がいかに変化しやすいかを理解しないことであった (Marshall 1961a, 762; 訳 I, 173)。

こうした単純化は、貨幣や外国貿易を扱っている間はほとんど害をおよぼさなかったが、異なった産業諸階級間の関係を取り扱うにいたるや大きな害を与えた。

彼らは労働者の見地に立つことなくして、労働を単に商品とみなすに至った。労働者の人間的感情・本能・習慣・反感・階級的嫉妬・階級的執着および知識の欠乏と自由に澆刺と活動する機会の欠乏などを斟酌しなかった。彼らは、実際よりもはるかに多くの機械的かつ規則的作用を需要供給の力に帰して、当時のイギリスにおいてさえ実際に適用されなかった利潤および賃金に関する法則を打ち立てた。

しかし、最も重大な欠陥は、産業の慣習や制度がいかに変化しやすいもので

2) バジヨットは「イギリス経済学の基本公準」で次のように述べている。イギリスの経済学は「実業の科学」(science of business) という方がよく、人間はビジネスの動機によってのみ動く想定している。物をつくる人間は誰でもそれをお金のためにつくる。そして、いつも最小のコストで最大のものをもたらすような物をつくと想定している。「単純化のために」そうするのであり、イギリスの経済学者は「実際の人間でなく、架空の人間について」語っている。我々が「実際に見るような人間でなく、そのように仮定することが便利であるような人間について」語っている (Bagehot 1876, 217-18)。これはラスキンの古典派経済学、マーカントイル・エコノミー批判にも通じるものであろう。マーシャルは、バジヨット『イギリス経済学の基本公準』の学生版への“Preface”で、リカードの推論の仕方が実際に持つ意味をバジヨットほど適切に示せる人はいないと書き、「文章体の師であり、実際問題の指導者であるバジヨット」を、表現形態において模倣しようとしたという (Hutchison 1953, 87; 訳 (上), 79)。

あるかを理解しなかったことである。とくに、貧者の貧困の原因だとされる弱さや非能率が、実は貧しさの結果であることに気づいていなかった。現代の経済学者が抱いている労働者階級の生活状態の巨大な改善可能性に対する信念を抱いていなかった。(Marshall 1885c, 155-6、訳 182-3)

「リカードを中心とするあの輝かし演繹的推論の学派」は、貨幣と外国貿易の問題を扱っている限り、優れた成果を収め安全な地歩を占めていた。貨幣の理論はまさに、富の欲求以外の人間的動機を深く省みなくても弊害はほとんどない経済学の分野であった。マーシャルはこの箇所注を付して、リカードの「知識は一面的であり、彼は商人を理解できたが、労働者を理解しなかった。しかし、労働者に共感をもっていた、…」と述べている。他方、リカードが「こみ入った迷路を巧みに通り抜けて新しく意外な結論に到達する能力は比類なく優れていた。」しかし、彼の推論の後をたどるのはむずかしく、リカードはその点を説明していないし、最初にある仮説にたち、次に別の仮説にたつて研究を進めていく真意は何であるかといったことを明らかにしていない、のであった (Marshall 1961a, 761, fn.12: 訳 I, 171, 172-3)。

さらにマーシャルはリカードをフォローしていわく。リカードはもともと公刊を意図して書いたのではなく、とくにむずかしい問題について自分と少数の友人の疑問は晴らすために書いたのである。その友人も彼と同様に、実社会の実情に通暁した実際家であり、このことが特定の種類の事実から特定の帰納をするよりも、一般的な経験に適合する概括的な原理を選ぶことになった理由であろう、と (ibid.)。リカードの推論の仕方に対する擁護に見られるマーシャルの態度・アプローチの基本は、「経済学者の旧世代と新世代」の次の一節によく現れている。リカードのような旧派の経済学者が直観的に当然のこととして認めた「潜在的前提」(背後に潜む前提)を補うことによって、より正しく理解できるとする旧派へのアプローチの仕方は、経済理論と経済学史双方におけるマーシャルの独創性の基礎になっている (Winch 2009, 246)。

往時の経済学者の部分的な思想を解釈する技巧も増大した。彼らの大多数が

注意深い観察の習慣をもつ真の見る人であったこと、彼らが言わんとしたことは、大部分はその制限内で真であったことを学ぶのである。ただ彼らが言ったことは、彼らが直観的に当然と考えた潜在的前提を補わない限り、彼ら自身の心の中にあったものを必ずしも十分に我々に示し得ないのである (Marshall 1897、298-9：訳 224)。

他方で、最近 50 年間における人間の性格の変化には目覚ましいものがあった。19 世紀初頭には数理的・物理的な科学のグループが主導的であったが、世紀が進むにつれて生物学的なグループが台頭し、有機的成長の性質について明確な観念をもつようになった。それは倫理・歴史諸科学にも大きな変化をもたらし、経済学もその例外でなく、「人間性の柔軟さと、人間の性格が現行の富の生産・分配・消費の方式に影響し影響される仕方にますます多くの関心を払うようになった。」そして、この新しい傾向の最初の重要な表現がミルの『経済学原理』に見出されるようになった (Marshall 1961a,762-64：訳 I,173-77)。

19 世紀初めには、数学的物理的諸科学が隆盛を極め、それらは、その研究対象がすべての国すべての時代を通じて恒常不変であるとする点で共通であった。世紀が進むにつれて、生物学系の諸科学が発展し、有機的成長についてしだいに明確な観念をもつようになり、この新しい考え方が人間に関する諸科学にも広がっていった。「ゲーテ、ヘーゲル、コントおよび他の学者は、異なる仕方において、人間の内的性格および外的制度の発展に注意を促し、人間性の様々の側面の成長の態様を探求し比較するという方向へ努力を重ねた。」生物学の偉大な進歩はすべての人々の注意を奪い、精神科学、歴史学を変化させ、経済学もこの一般的動向に与した。この変化は、「世界の隅々におけるすべての新時代の人々に一時に押し寄せた時代の抗しがたき力に負う」ものであった (Marshall 1885c, 154：訳 180-1)。

マーシャルは『原理』第 1 編の最後で、生物学は人類の将来に新しい希望を与えたとして、次のように言う。経済学者もいまでは「人間の進歩の可能性に

ついてもっと広く明るい見解をもつ」ようになった。彼らは人間の意志は慎重な思考に教えられて、環境を調節することによって性格をかなり改善し、それによってさらに一層性格形成に有利な、したがって「道徳的および経済的福祉にとって有利な新しい生活条件を生み出すことができる」と信じるようになった (Marshall 1961a, 48 : 訳 I, 59)。

周知のように、マーシャルにとって、経済学のメッカは経済生物学であり、マーシャルのアプローチは、mechanical に対抗して biological であり、organic であった。「経済学者の旧世代と新世代」で、社会科学は「理論化された人間の歴史」(reasoned history of man) であり、それは一つの根本的な統一に向かってその道を進めつつあると言う。それは物理学すなわち「理論化された自然現象の歴史」によってなされつつあることと同じであり、物理学は分子運動を支配している諸力のうちにその隠された統一を求め、社会科学は人間の性格の諸力のうちにその統一を求めている。すべて歴史はそういう傾向があり、そこから将来に対する予言と指導が始まる。

そしていわく。

経済学において、我々は、たとえ人間性のある特殊な側面に主たる力点を置くとはいえ、要するに人間性の全体を取り扱うのである。我々の論じることが過去の歴史に立脚する場合には、それは全体としての歴史でなければならない。我々は経済史以上のものを、すなわち経済制度や習慣、賃金や価格、産業や財政等の歴史以上のものを必要とする — 人間自身の歴史を求め、それに貢献するような経済史を求める。…… 過去における経験は人間性の上に光を投げ与える。かかる経験の歴史は人間性の動態の上にも静態の上にも光を投げ与える — それは人間性がある時代にどうであったかを示すだけでなく、いかに発展してきたかを示す傾向がある。それはだから、将来における人間性の発達の方角と程度を評価するための大きな助けを提供し、とくに社会的改革に対する果敢な近代的企画を考察するときに、最も理解する必要がある人間性の側面についてそうである (Marshall 1897, 299-300, 訳 224-26)。

マーシャルのリカード評 (2) 価値論・価格論

「リカードの復活」 スミスの重要な仕事は、価値の理論に関する同時代とそれ以前の思索を総合し発展させたことであつた。彼が、経済学史上の画期をもたらしたといえる最大の根拠は、一方で富を得ようとする購買者の欲求と、他方でその生産者の努力と犠牲（あるいは「真の生産費」）とを測定することによって、価値が人間の動機を測定する仕方について綿密で科学的な探求を企てた最初の人であるという点にあつた（1961a、758-9：訳I、166）。『国富論』以降の優れた経済学上の著作とそれ以前の著作とを区別するのは、「物を所有せんとする欲望とそれを得るために貢献する努力および自制を、貨幣によって比較衡量するということに関する洞察」にあつた。スミスの見解は、リカード、クールノー、ヘルマン、ジェヴォンズその他の人々によって発展させられた（Marshall 1885c、157-8、訳185-6）。

リカードは「経済学の車両を誤った軌道に入れた」というジェヴォンズの評価はよく知られている。「リカード＝ミル派」の影響力のもとで、需要、消費の問題はなおざりにされてきた。リカードが交換価値を規制する要因の分析にあつて、生産費の側面に力点を置きすぎ、それが経済学的な思考のならわしになったために弊害がおきた。しかしマーシャルによれば、「リカードとその主要な継承者は価値の規制に需要条件が供給条件に劣らず重要な役割を果たすことに気づかなかつたのではないが、この点を明確に表現していなかつたために、非常に綿密な読者でもない限り真意を正しく理解できなかつた」のである（Marshall 1961a、84：訳II-4）。

マーシャルは『経済学原理』第5編で「需要・供給および価値の一般的関係」（「需要と供給の均衡」）を扱う。需要と供給の一般的関係、とくにその関係を「均衡」させる価格の調節作用と関連した需給の動きについて検討する。そして第3章で「正常な需要と供給の均衡」を扱い、生産量が市場の状態に合うように調整され、正常価格が正常な需要供給の安定均衡点において決定される過程・仕組みを検討する。そのなかで、ある物の価値は結局その生産費に対応して決まるという学説を解釈しこれに限定を付けていき、均衡という概念に

ついて綿密な検討を行う、そして「生産費」か「効用」かどちらが価値を規制するのかという論争について、付論 I を付けて「リカードの価値論」を再評価している。実は、改訂第 4 版以前には、第 5 編の最後に「価値に対する生産費の関係についてのリカードの理論」に関して「8 ページに及ぶ余論」を置いて、「リカードの復活」をしようとしていた (Ashley 1891, 476)。その最初のパラグラフは第 5 版以降では、第 5 編の最後に置かれていて、リカード評価の要点をおよそ以下のようにまとめている。

リカードの価値と生産費の関係に関する理論は経済学史上たいへん重要な地位を占めているので、その真の性格を誤解すると、弊害はきわめて大きなものとならざるをえないが、不幸にもそれはほとんど誤解を招くような表現のしかたになっている。その結果、その理論は現世代の経済学者によって再構成される必要があるという考えが広く行きわたっているが、マーシャル自身はその考えを受け入れない理由を付論 I で示すとしている。反対に、リカードが敷いた理論の基礎は今日も揺らいでおらず、その基礎の上に非常に多くのものが築かれてきたが、そこから取り除かれたものはほとんどないのであった。リカードは需要が価値を規制するうえで不可欠な役割をもつことを知っていたが、そのはたらきは生産費に比べると相対的に単純ではっきりしているから、軽く触れておくだけにとどめたのである。またリカードは、生産費が、— マルクスが、リカードは生産に使用される労働の量だけに依存していると主張したのとは違って—、その労働の量だけでなく質にも依存し、さらに労働を補助するのに必要な貯蔵資本の大きさ、補助が行われる時間の長さにも依存すると考えていた (Marshall 1961a, 503: 訳 III, 236-7)。

付論 I でこうした評価が詳論される。マーシャルは、リカードの思索は深いとその文章はわかりにくく、きちんと説明をせずに身内の用語を使っているために、彼が言おうとしていることを正しく理解するには、彼の言葉・文章を「善意にとるように寛大な態度でのぞまなくてはならない」と述べながら、「リ

カードのいささかむき出しの学説に暖かい衣装をまとわせて、再評価」しようとした (ibid. 813、816 fm：訳Ⅲ、286、292)。

それによれば、まずリカードは、効用は（正常）価値の尺度にはならないが、価値がそもそも成立するためには「不可欠なもの」であり、「分量が非常に少ないような」物の価値は、「それを保有したいと欲する人々の富の大小と性向の強弱に左右される」と論じている。効用の影響は相対的に単純であるから、ことさらに論述しなくてもいいと考えた。さらに、価値と富の区別に関して、リカードは限界効用と全部効用の区別に行きつく道筋を手探りで進んでいたとも言え、富で全部効用を意味し、価値は商品の限界分から生じる富の増分に依拠して決まり、供給の抑制によって限界効用は上昇するが、全部効用は縮小すると言おうとしていたのであった (ibid.814：訳Ⅲ、286-7)³⁾。

リカードは、生産費と価値の関係について一般の理解が不十分であるためにこの主題に限定して論述を進めた。しかし、近道を取り、収益逓減、不変、逓増の3つの部類を承知はしていたが、この区別を無視してすべての種類の商品に適用される価値論を展開するのがよいと考えた。リカードは第Ⅰ章で順を追って、資本の充用がほとんどない社会の初期段階では、商品の価値は投入された労働の分量に依存し、文明が進んでくると、労働の質にも依存し、さらに労働を補助する機械・用具および建物に投入された労働も考慮しなくてはならず、商品が市場に出荷されるまでの時間の長さにも依存することを示している。さらにマーシャルは以下のようなリカードの注記を引用して、価値は投入された労働だけからなるという命題を主張するためにリカードを利用したロートベルトゥスやマルクスを批判している。リカードによれば、リカードがある物の費用と価値は同じだと考えているというマルサスの理解について、生産費に利潤を含めて理解しているならその通りであるが、生産費に利潤を含めてい

3) リカードの寡黙さが誤解のもとになったと言わざるをえない。彼は正常価値の問題では、いろいろな要素が互いに規定し合っているものであり、長い因果関係の連鎖で逐次一が他を規定しているのではないことを明確に述べていないし、ときには自分でも明瞭に感知できなかったようだ。「重大な経済学説を簡単な文章で表現しようと努めるというよくない習性を形成した点で、リカードは他の誰よりも強くその責任を追及されてよいだろう」(Marshall 1961a, 816: 訳Ⅲ、291-2)。

ないのであれば、リカードを正しく理解しているとはいえないのであった。

マーシャルによれば、もしリカードが以下の命題を繰り返しておけば、誤解は避けられたであろう。すなわち、2つの商品の価値がその生産に要した労働の分量に比例するとみなされるのは、他の事情に変わりがないという条件のもと、つまり、2つのケースで投入された労働の熟練度が同じで賃金も同じであり、その投資期間を考慮したうえでも相対的には等しい資本量をもって装備されており、しかも利潤率も等しいといった条件が成立している場合だけであるという命題である (ibid. 815-6: 訳Ⅲ、289-92)。

アシュリーはマーシャルによる「寛大」な「リカードの復活」を批判した。リカードにおいて、生産費を形成し価値を規制するのは労働の分量だけであり、この点はほんのわずかの修正しか要しない。こういう解釈がリカードの著作の全体といちばんよく適合している。アシュリーの批判の詳細については別の機会に述べたいが、「寛大」なりカードの再解釈は、彼が首尾よく言えたことだけでなく言おうとしたことを含み、ある場合には「彼の頭脳を犠牲にして心を救う」ことになるのであった。アシュリーによれば、経済学の発達を扱うときには、主要な力点、特別のメッセージを把握することが大事であり、経済史家は理論的に混乱しがちであると言われてきたが、「同情的な理論家は歴史的でないという危険を冒している」と付け加えなければならない、と結んでいる (Ashley 1891, 489)⁴⁾。

リカードとジェヴォンズ マーシャルいわく。現代の経済学者のなかでジェヴォンズほどリカードのすばらしい独創力に墨を摩していった人はおそらくいない。しかし、ジェヴォンズはリカードとミルに非常に厳しく、「省察と探求を重ねた結果、価値はまったく効用に依存している」と唱えるにいたった。ジェヴォンズのこの命題は、リカードの価値は生産費に依存するという命題に比べ、同じように一面的ではるかに誤解を招きやすい。ジェヴォンズの中心的な命題は、「生産費が供給を規定し、供給が効用の最終度を規定し、効用の最終

4) この点については、付論 C「経済学の領域と方法」における議論も考慮して、さらに深める必要がある。

度が価値を規定する」というものであった (Marshall 1961a, 817: 訳 292-3)。

これに対してマーシャルは、ジェヴォンズの命題の順序を変えて次のようにしても、劣ることがないだろうという。すなわち、「効用が供給さるべき分量を規定し、供給さるべき分量が生産費を規定し、生産費が価値を規定する。」というのも、生産費が生産者に生産を続けさせていくのに必要な供給価格を規定するからである。そして、リカード説には多くの批判点はあるが、深い洞察力をもち「生活の実態によく近接している」と述べて、リカードのマルサス宛の手紙から次のような引用をしている。「価格の規制において買い手はきわめて微力であり、すべては売り手の競争によってなされる。… 価値を規制するのは供給であり、供給を規制するのは比較生産費である。貨幣額で表示した生産費のなかには労働の価値のほかにも利潤額も算入される」(ibid. 818 - 9: 訳 III、296-7)。

そして、ミルの需要供給の法則とそれに対するジェヴォンズの評価に触れた後、以下のようにまとめている。「「生産費原理」と「最終効用」原理とは、明らかに全面的に妥当する需要供給の法則を構成する部分に他ならない。いずれもはさみの片方の刃にすぎない。一方の刃がじっとしておれば、他方の刃が動いてもものを切る。このとき我々は不用意にも片方の刃だけでもものを切ったと言ってしまうかもしれないが、こういう命題は公式に表明し、苦勞して弁護しなくてはならない性質のものではない」(ibid.820: 訳III、298-9)。

マーシャルによれば、ジェヴォンズは需給の力をもつ広範な均斉さを過小評価したのであり、彼が、需要価格と価値の間にだけある関係が効用と価値の間にもあるかのように語るくせをもたなかったなら、リカードやミルに対する敵対もそれほど激しいものにはならなかつただろう。「需要と供給が価値に対してもつ一般的関係の基本的な均斉さ」を強調していたならば、敵視は和らげられたであろう。ジェヴォンズが『経済学の理論』を出した頃は、価値論の需要側面が軽視されており、彼がこの側面を強調・展開することによってすぐれた貢献をなした事実を忘れてはいけない。ジェヴォンズほどに、我々が高くまた多面的な感謝の念を捧げなければならない学者はほとんどいないのであるが、だからといって、彼の偉大な先行者たちに対する批判をそのままのみにして

いいことにはならない。経済学がジェヴォンズに負うものは、疑いもなく、「リカードに対する卓絶した感謝の念」に比肩されるほど大きなものがある。しかし、ジェヴォンズのリカード批判は衡平さを欠いていた。それはリカードが需要側面を考慮することなく価値は生産費によって規制されると主張していたという想定にたっていたからである。この「リカードに対する誤解が 1872 年当時は経済学を大いに毒していた」(ibid. 820: 訳Ⅲ、299、301)。

3. 「欲望」と「活動」：進歩と有機的成長

マーシャルは『経済学原理』第 3 編「欲望とその充足」の「序論」でも、近年に需要・消費の研究が前面に押し出されていること理由として、生産費に過大な力点をおくことが経済学研究の習わしになったこと、数理的な思考を経済分析に応用する経済学者が出てきたことを挙げ、第 3 の要因について次のように述べている。時代の精神が、「公共の福祉 (general wellbeing) を今より一層増進させるように、増大していく富を活用できないかという問題」に深い注意を向けさせるようになった。また、集合的用途であれ私的用途であれ、「富のある構成要素の交換価値が幸福ないし福祉に対してなす増し分をどの程度正確に表わしているか」を吟味することが必要になった。

そしてこれに続けて、第 3 編では、「欲望」とその充足について、「努力・活動」との関連を考えながら研究を進めるとして、リカード・古典派のスタンスを次のように再評価しながら「序論」を締めくくっている。

人間の進歩していく性質は、一つの有機的な全体を形づくっている。我々が人間生活の経済的側面だけを分離して研究してなおよい効果が取められるのは、ただ一時的また暫定的に分割し研究する場合だけのことであり、そうするにしても経済的側面を全体として観察するように慎重な考慮を払っていくようにしなくてはならない。この点を強調しておかねばならない特別の理由がある。リカードとその継承者が欲望の研究を比較的軽視したことに対する反動として、反対方向の極端に走る兆候が現れてさえているからである。リカードとその一派がいささか排他的に強調しすぎたきらいはあるが、あの

偉大な真理、すなわち下級動物の場合には欲望こそ生活の規制者であるかもしれないが、人類の歴史を解く鍵を求めるには努力と活動の形態の変化こそ注目しなくてはならないという真理を、確認しておくことが重要である。(Marshall 1961a, 84-5：訳Ⅱ、4-6)

要するに、需要論を扱う第3編「欲望とその充足」も、欲望を努力・活動との関連の考察から始め、「人類の歴史を解く鍵を求めるには努力と活動の形態の変化こそ注目しなくてはならないという真理を」、確認しておくことが重要であった。そして第2章「活動との関連における欲望」でいわく。「消費の理論が経済学の科学的基礎をなす」とみるのは正しくない。欲望の科学において主要な問題とされるものの多くは、努力と活動の科学から導き出されたものである。そして、いずれが人間の歴史の解釈をするのに適しているか強いて問うならば、それは活動の科学であると答える他ないと (ibid. 90：訳Ⅱ, 12)。実際、「経済進歩の本当の基調を作り出すものは、新しい欲望の形成ではなく新しい活動の展開」であった (ibid. 689：訳Ⅳ, 249)。

この「欲望と活動」の議論は、マーシャルが『経済学原理』第5版の改訂で加えた最終章「生活基準との関連における進歩」につながる。ここでは、「生活基準」(standard of life) が、「欲望」あるいは「安楽基準」と対比される。「安楽基準」(standard of comfort) と対比された「生活基準」とは「欲望を考慮に入れた活動の基準」であり、「生活基準の上昇は知性・活力および自主性の向上を意味し、支出の仕方がより綿密で思慮深くなり、食欲は満たすが体力を増進しないような飲食を避け、肉体的にも道徳的にも不健全な生活を退けるようになる」のであった (ibid. 689：訳Ⅳ, 249)。このように生活基準は、人間の経済的・物質的側面だけでなく、知的・倫理的成長、慣習を含むのである。

マーシャルは第2版の改訂で、「生活基準」について、安楽品やぜいたく品だけでなく、労働にとっての「慣行的な必需品」も固定したものでなく、労働の能率とともに変化していくとし、「賃金を上昇させる正しい方法は、単に欲望あるいは安楽の基準を高めるだけでなく、欲望と同時に活動をも含む生活基準を向上させていくことにある」と述べていた (Marshall 1961b, 40：訳

I, 222)。そして、「全住民の生活基準が向上すれば、国民分配も大幅に増大し、各階層各業種の分け前も増大するだろう。どれか一つの業種ないし階層の生活基準が向上すれば、その能率も上昇し実質賃金も増大する。さらに国民分配もいささか増加させ、他の業種ないし階層の者が彼らの用益を能率と比較して多少とも少ない費用で確保できるようになるだろう」(Marshall 1961a, 689-90：訳 IV, 249-50)。

労働者階級の生活基準の向上こそ、労働者の知性・活力、あるいは効率、生産性を引き上げ、その結果として国民分配の増大、賃銀稼得の増大、そして生活状態の改善および子弟の教育水準の向上、労働者の資性向上、換言すれば生活基準の上昇 [生活の質・生の向上] という経路を経て、有機体としての国民経済は累積的に成長することになる。つまり、「生活基準」の向上は、労働者の貧困を排除し、教育・生活環境の改善によって労働者の能力を十分に開化させ国民経済を成長させる、あるいは労働者の資性向上と国民分配の増大とを相互に増進させる基礎概念であった。

4. 富の増大よりも生活の質の改善

マーシャルが、倫理学から経済学に関心を移したのは、人間の「良き生」の手段として、「富の増大よりも生活の質の改善」に着目して経済学を研究する必要があると強く感じたからであった。それは、「労働者の福祉に直接結びついた経済問題」と題された最初期の「経済学講義」(*Lectures to Women*) や『労働者階級の将来』(ともに 1873 年) に如実に現れているが、『経済学原理』の最終章「生活基準との関連における進歩」でも同じであった。また、未刊の最終巻『進歩 Progress』の第 1 編第 3 章「賃金、効率性および良き生」においても、賃金、労働者の効率性、「活動」(activities) のもとになる人の「健康・強さ・活気」(vigour)、進歩の目標としての人間・社会の「良き生」の関係についてのマーシャルの考え方がよく出ている (Caldari and Nishizawa 2015)⁵⁾。経済・社会の進歩は人の強さ、性格、道徳基準を含む効率性の上昇を前提にしている

5) マーシャルの未完の最終巻『進歩 Progress』については、Caldari and Nishizawa (2015) を参照、手稿からの引用は folder の番号で記す。

のであった。労働者の効率性はその人がもつ一連の資質であり、彼が置かれている環境に大きく左右される。それが稼働するときの潜在能力 (potency) は、環境・労働条件に左右されるが、効率性を形成する要素は多様で、その相互の重要性はその人の仕事と他の状況によって変わるのであった (folder 6.21.1)。

仕事と生活 「生活の質」に関連して、マーシャルは「仕事」と「生(活)」、日々の仕事は性格形成・人間性の改善の場であることを早くから主張していた。アメリカ旅行の後に書いた「アメリカ産業の特徴」(1875年)には、ある国の産業・労働状態が倫理的発展に対してもつ関係についてのマーシャルの見方がよく出ている。経済状態が人間の性格に及ぼす影響、「毎日の仕事は性格に及ぼす効果」が大きなテーマで、『経済学原理』冒頭でも、「人間の性格は日常の仕事により形成される」と書かれている。

仕事 work は過ちに対する罰ではない。それは性格形成に不可欠であり、したがって進歩に不可欠である。..... それは人間の性格形成の'back bone'となる (folder 5.6)。

マーシャルは、ある人が労働者階級に属するというとき、「彼の労働が、作る物に対して生み出す効果よりも、彼自身に対して生み出す効果」を重視した。ある人の仕事は彼の性格に教養と洗練さを与える傾向をもつなら、彼の職業はジェントルマンの職業と言え、他方ある人の仕事は彼の性格を粗暴で粗野にしておく傾向があれば、彼は労働者階級に属する。「富というのは一般に、若い時の教育と教養、生涯を通しての広い関心と洗練された交友を意味する。そして富のもつ主要な魅力は、性格に対するそのような効果によるものである」(Marshall 1873, 103-4 : 訳 196-97)。そしてマーシャルは、「時代の名誉のために」として、熟練労働者の多くは着実にジェントルマンになりつつあると言う。そうして「富は物質的にも精神的にも増大する。活力のある精神的な能力は継続的な活動を内包している。最善の意味での労働、すなわち能力の健康

で精力的な行使は人生の目的であり生活そのものである。そしてこの意味で、すべての人が今日よりもより完全な労働者になるだろう」(ibid. 114-15: 訳 212-13、傍点は引用者)。これが、『労働者階級の将来』の見通しであり、こうした展望は、マーシャルの著作をかなり一貫しているように思われる。

未刊の書『進歩 Progress』の最初の部分で、「進歩の性質」を論じて、「『経済的進歩』(economic progress) という用語は狭い」という。マーシャルは、進歩、発展の多面性、複雑性、有機的なつながりを認識し、「物的富の増大が人間生活の向上に資する」場合にのみ、進歩があると考えた。『進歩 Progress』の第 3 編は「経済的将来の可能性」と題され、「仕事と生活」を中心に論じる第 1 章は、「経済的進歩が生活の質に及ぼす影響」などの節を含み、第 3 章「経済的将来の可能性」でいわく。

我々の真の目的は人間生活の向上であり、それを十全で強くすることである。(個人的、社会的側面、道徳的、宗教的側面、肉体的、知性的、感情的、および芸術的側面、すべての側面における生)。(folder 5.9)

全幅的生、富と生、良き生のための富という思想は、その限りにおいてラスキンと共通性をもつように思われ、これはマーシャルの有機的成長の経済学、進化的経済学の大きな規定要因であった。富と人間の生活・仕事・能力、経済的進歩と生活の質の向上についてのマーシャルのこのような思想は、「生こそが富である」(No wealth but life) と説いた同時代のオクスフォード理想主義者ラスキンの思想に近いように思われる。ラスキンは「富」にならないものを「害物」(illth)と呼んだが、ある物の経済的有用性は、物だけでなくそれを使用する人間の能力や志向に依存していた。それ故、「富の科学である経済学は、人間の能力と志向に関する学問でなければならず」、富の蓄積は、「物質と同様に能力の蓄積」を意味すべきであった(Ruskin1860, 112-14: 訳 118)。生活(生)と富、人間と富(経済)、人間から切り離された経済—この二つを結びつけることがラスキンのヴィジョンであった(塩野谷 2010, 65)が、それはマー

シャルのヴィジョンでもあったように思われる（西沢 2014、103-4）。

マーシャルが言う個人・労働者の効率性を形成する要素は非常に多面的であった。効率性のこのような多面的な要素を考えると、「人間の効率性の社会的価値は、効率性を構成する資質の総計と同じようにほとんど計測不可能である」。だから、労働者の「仕事の所産についてその貨幣価値を量的に正確に測ることはできるが、彼自身の効率性を構成する一連の資質については計測不可能である」（folder 6.21.1）。労働者の効率性は、一方でもちろん物質的富の成長に寄与する。効率性は生産性の要件であり、それが一国民の経済成長の基礎であることはアダム・スミス以来よく知られている。マーシャルによれば、さらに、生産性、産業の所産は、通常は経済的側面との関係ではほとんど考慮されない要素を含むもの、性格、利他心、道徳とかに依存するのであった。「一国の富は、一定の貨幣価値をもった物質的な物だけでなく、量的に計測できるかどうかとは関係なく、非常に重要な経済的重みをもつ要素からも成り立っている」（Kaldari and Nishizawa, 2015）。

5. 進歩—有機的成長の基礎：道徳・教育、環境

道徳化する資本主義

T.H. グリーンおよび A. トインビーのオクスフォード理想主義とマーシャルとの関係はしばしば指摘されてきた。それによれば、「マーシャルとグリーン
の双方に共通するものは、道徳化された資本主義 (moralized capitalism) の強調であり、それによって人間の最高度の可能性が発展するのであった」（Jones 1971, 7）。古典派経済学者は労働者階級の徳性の変化・能力の向上について悲観的であったが、マーシャルの経済思想は「道徳化する資本主義」を具現化していた。マルサスの見通しに代えて、マーシャルの「道徳化する資本主義」と有機的成長論は社会問題を見る眼・見方にも大きな変化をもたらし、救貧法から福祉国家への転換に理論的基礎を与えることになった（西沢 2007、第 IV 部第 1 章）。マーシャルがラスキンをどの程度読んだかは定かでないが、「富」の正確な定義を与え、富のあり方は社会の道徳に依存し、富の獲得は社会の道徳的条件に依存することを示そうとした『この最後の者にも』のメッセージは

(塩野谷 2012, 156)、マーシャルの道德化する資本主義に重なるように思われる。⁶⁾

『産業経済学』(1879 年)の「人口増加、マルサス、救貧法」という章でマーシャルは論じた。熟練労働者は、中流階級が感じているように、子供の教育に対する責任感なくしては、結婚しなくなる。「ある所与量の必需品、便宜品および贅沢品を享受できるという予想なしに、結婚しなくなるような将来の見通しをつける慣習」を身につける。「一番重要なものは、子供のための健全な肉体的、知性的、道德的教育」であり、経済進歩は道德水準の変化に依存し、家族愛の強さに依存している (Marshall 1879: 28, 32; 邦訳 35, 40)。『労働者階級の将来』でマーシャルは次のように述べていた。「すべての父親は子供たちに対して、自分よりも人生でより幸福でよりよい運命を準備してやる義務を負うという真理は、いまだに理解されていない。」「貨幣を借りた人は利子をつけて返さなければならないのと同じように、人間は自分の子供たちに、自分が受けたよりもより良いより完全な教育を与える義務を負う、という原理である。人間はこのことを行う義務を負う」(Marshall 1873, 117: 訳 215-16)。

進歩の重要な条件は教育であり、その主要な目的は「精神的活動を完全に (thorough) にする」ことであった。「健全な学校教育の普及は、不熟練労働者の子供でさえも、彼の今の仕事よりももっと高い質の能力を喚起する仕事に就く機会をもつことを可能にする」のであった (Caldari and Nishizawa 2011, 128, n.3)。

家族のものを自分が社会に出た時よりも高い社会的な階梯から出発させたいという願望ほど、人にその活力と機略を奮わせるものはない。中流階級、とくに知的職業人はたえず子供の教育投資のために貯蓄し、労働者階級は賃金の相当部分を子供の健康と体力の向上に投じてきた。旧派の経済学者は、人

6) なお、福田徳三は高等商業学校の修学旅行報告書 (1894 年) の一節を、「一國徳義ノ進歩ハ即チ一國生産ノ進歩ヲ誘導スル所以ノモノナリ」と結び、シジウィック、マーシャルを参照している (西沢 2007, 521-22 を参照)。

間の能力はいかなる資本にも劣らず重要な生産手段だという事実を考慮しなかった。現代の経済学者は、賃金労働者への配分を増し資本家への配分を減らすような富の分配の変化は、物的生産の増大を促進すると論断して差し支えなからう (Marshall 1961a, 228-30 : 訳 II, 200-2)。

新鮮な空気と衛生環境、人々の強さ マーシャルにとって、人間は生産の目的であると同時にその要素でもあり、「人間の数における成長、その健康と強さ、知識と能力、性格の豊かさの増大こそ」は、あらゆる研究が目的とすべきものであった (ibid, 139 : 訳 II, 82)。『経済学原理』の「生産要因」を扱った第4編に、「人々の健康と強さ」という章を設け、肉体的、知性的、道徳的な側面で、人間の健康と強さを左右する条件を研究した。それは「産業上の能率の基礎」であり、物的富の生産はそれに依拠した。人間自身の強さ、すなわち決断力、活力ないし克己力、要するに「活気」(vigour)こそは「あらゆる進歩の源泉」であった (ibid, 194, 202-3 : 訳 II, 156, 168)。人々の生活を「十全で強く」することが決定的で、留意すべきことは人々の生活であり、「肉体的、精神的、道徳的活気」であった。

理想は安楽・慰めではなく生(活)であり活気(精力)である。大衆の安楽・慰めは考慮しなければいけない。大衆から砂糖やタバコを奪ってはいけない。しかし、我々が留意すべきことは、彼らの生活であり、肉体的、精神的、道徳的活気・精力である (folder 5.9)。

マーシャルは、公的および私的な資金の用途として、都会の公園や遊び場の整備より有益なものはないと考えた。子供が元気に遊べる場をつくり、都会のどの家にもきれいな空気と光が入るようにし、彼らの本当の良き生のために、相対的な貧困層のひどい害悪を軽減することは、富者の消費に手をつけなくてもできると主張した (Whitaker 1996, III : 67)。マーシャルも都市化が労働者階級の生活に与える影響を考察し、風紀と生産的能率の維持、都会生活の「居住性」という問題をよく認識していた。彼は人々の健康と力を維持し改善する

ための環境・衛生の整備について論じ、改善のための運動に積極的に加わった (Marshall 1961a, 200 : 訳 II, 163-64)。

マーシャルは「経済騎士道の社会的可能性」で、「富の使用における騎士道」を論じた。個人の経済騎士道は社会全体の騎士道を刺激し、富者に大きな負担をかけないで年々 1, 2 億ポンドの増収を生み、公共のために利用できる。このような資金で、「国家は屋外の快適な生活 (amenities of life) のために注意を払い、市民や子供が休日の散歩に出ると間もなく新鮮な空気と様々な色彩や光景に接することができるようになる。」健康で強い人は誰も自分の家の整備はできるが、「自然や芸術美を一般市民の手の届くようにすることができるのは国家だけである。」 (Marshall 1907, 344-45 : 訳 305)

こういう問題に対するマーシャルの省察は、ロイド・ジョージ予算の議会討論の最中に書かれた『タイムズ』宛の手紙によく示されている。老齢年金よりも、人を陶冶するための人的投資と緑環境の整備が急務であった。

一国の最も重要な資本は、その国民の肉体的、精神的、および道徳的養育に投資されるものである。それは、たとえば一千万人ほどの人口が適切に緑地に接近できることから排除されていることによって、無謀にも無駄にされている。この害悪を救済することこそは、老齢年金を準備することよりも緊急の課題である。都会の急速に上昇する地価に対して「空気浄化」税 ('Fresh Air' rate) をまず課すべきだと思う。そしてそれを、密集した工業地域の真ん中に小さな緑地を作り出したり、融合しがちな町と町、郊外と郊外の間広い緑地を保存することに使うべきだと思う (Whitaker III, 235-36)。

有機的成長、進歩という概念は多面的で、単に物的富の増大ではなく、精神的・道徳的能力の発達を含む。生活の質の向上が進歩の指標であり、それには一定水準の所得だけでなく、労働・仕事・生活の環境、経済的な尺度だけでは容易に測れない他の要素 (新鮮な空気、緑地、あるいは文化など) が必要であった。マーシャルは、経済システムを他の社会的、文化的、制度的コンテキ

スト、あるいは社会的諸力から切り離してしまうことを欲せず、有機体としての社会的諸力にたえず注意を払っていた。

6. 旧世代から新世代へ：補論

マーシャルは、「老齢貧民に関する王立委員会」において「マルサスの大難問」が除去され、世紀の初めと比べて問題の性質が大きく変化したことを強調した。

[救貧法の理念的基礎になっている旧派の経済学の] 教義によれば、もし富者に課税して労働者階級に貨幣を与えると、その結果労働者階級の数が増加し、次世代の賃金を低下させる。したがって、この補助金によって労働者階級全体の境遇が改善されたことにはならない。しかし、この点に関してある変化が生じており、それが現世代の経済学を過去の経済学から分けている。……この点こそ私が力説したい要点であり、その変化は、もしその貨幣が次世代の稼得力を高めるような仕方では支出されるならば、賃金を引き下げようにはならないという事実を強調している (Marshall 1893, 225)。

さらに言う。中国のおかしな皇帝が、イギリスの全労働者に半クラウンを無償で与えたとしよう。19世紀初めには10人の経済学者のうち9人までが、それは賃金を下げると言った。もちろんそれは人口を増やし、賃金を下げるのであった。しかし、もしそれが人口を増やさないならば、その効果は賃金を上げることである。なぜなら労働者階級の増大した富は生活の改善を導き、もっと活気に満ち教育のあるより大きな稼得力をもった人々を生み出すからである。だから賃金も上昇する。これが「相違の中心点」であった (ibid. 249)。

「産業報酬会議」に付論として提出された「賃金に関する理論と実際」でマーシャルが言うように、賃金に関する旧世代の経済学者と新世代の経済学者との大きな違いは以下の点にあった。双方とも賃金は資本から支払われると考える。しかし、旧派の経済学者が、賃金はその支払いのために予め用意されてい

る資本額に限定されているかのように論じるのに対して、最近 10 - 15 年間の新世代の経済学者は別様に考える。すなわち、新世代の経済学者は、産業の効率が上昇してより多くのものが生産されれば、すでに手中にある資材はもっと速く利用され、また新たな資材がすぐに補充され、より高い賃金が直ちに支払われると考える。新しい世代の経済学者は、賃金が資本によって制限されるとは考えず、資本が増大するごとに賃金が上昇すると論じた。なぜならそれは産業の生産性を上昇させ、労働を求める資本家の競争を増大させて、全生産物のうち、資本が労働に譲らねばならない部分を増大させるからである (Marshall 1885b, 73-74)。

リカードは、賃金が生活必需品を満たす以上に上昇すると、人口が急速に増加し賃金の「自然法則」によって単なる必需品をまかなうだけの水準に釘付けにされると考えた。こうした賃金基金説に対して、高賃金がそれを受け取る人々だけでなくその子孫の能率をも向上させるという研究が、ウォーカーをはじめアメリカの経済学者によって進められ、高賃金労働は能率が高く、費用としては高い労働でないという事実ますます注意が払われるようになった。

マーシャルによれば、労働者階級の生活水準の向上こそ、労働者の知性、活力、あるいは能率、生産性を引き上げ、その結果として国民分配分の増大、賃金稼得の増大、そして生活状態の改善、および子弟の教育水準の向上、労働者の資性を向上させ、有機体としての国民経済は累積的に成長する。すなわち、生活水準の向上は、労働者の貧困を排除し、人的投資、教育によって労働者の能力を開花させ国民経済を成長させ、労働者の資性向上と国民分配分の増大を相互に増進させるのであった。

1905 - 9 年の「救貧法および窮乏救済に関する王立委員会」は、審議の過程で経済学者のアドバイスを必要とし、1907 年に委員の一人ウィリアム・スマートを通してマーシャルに援助を求めた。しかし、マーシャルは依頼に直接応えず、翌 1908 年に彼を継いでケンブリッジの経済学教授になるピグーに救貧法委員会での任を託した。マーシャルはこの年、「経済騎士道の社会的可能性」を発表し、生産の改善と国民分配分の増大を基礎に、イギリス経済の成長とそれがもたらす社会改革の賢明な方策のための財政手段について相対的に

楽観的な見方をしていた (Marshall 1907, 325 : 訳 267-8)。

マーシャルの主張は一般的な原則で、救貧法の諸問題の具体的な分析と報告はピグーに託された。「救貧法による救済の経済的諸側面と諸効果に関する覚え書」が、ピグーによって救貧法委員会に提出された。それは委員会の証言に補論として収録されたが、ピグー自身は証人として喚問されることはなかった。「覚え書」はマーシャルの思考の繰り返しであった。ここではピグーはまだ失業問題を取り扱うことはなく、貧困者の救済に問題を限定し、救済の様々な方法の経済的効果を評価しようとした。ピグーの基準は様々な政策が国民分配分に及ぼすだろう効果であり、国民分配分の規模が他のすべての社会的便益に必要な基礎だと考えていた。問題の中心は富者から貧者への富の移転が生産のインセンティブ、したがって国民分配分に及ぼす効果を確定することであった。彼によれば、1834年救貧法の原則、すなわち貧民の状態は国家の援助によって、自力で何とかやっている最下層の労働者の状態よりも快適にすべきでないという劣等処遇の原則は、神聖でも永続的でもなく、その後の経済成長によって、最低の生活維持品 (minimum provision) を最下層の不熟練労働者のそれよりもよくすることは、もはや国民分配分にとってそれほど有害ではなかった。「マーシャル教授が述べたように、我々は1834年に可能であったよりも……1907年には貧者に対してはるかに多くのことをなしうる」のであった (Pigou 1910, 992-3)。

7. おわりに

マーシャルは1896年10月にケンブリッジ・エコノミック・クラブで「経済学者の旧世代と新世代」について講演をした。この講演においてマーシャルは、経済学が19世紀に大きな成果をあげた定性的・質的分析に加えて、20世紀の経済学は定量的・計量的分析が必要であることを訴えたのであるが、同時に「経済騎士道の社会的可能性」におけるように、「社会理想と経済的努力の終局目標」についても論じている。ほぼ同様のことは、『進歩 Progress』の第3編は「経済的将来の可能性」でさらに展開されるのであるが、マーシャルが繰り返し述べたことは、人間性の進歩、人間の well-being の向上、物的富より

も人の生(活)の向上に経済学者の来るべき世代がどのように関わられるかということであった。

「経済学者の旧世代と新世代」でいう。社会的目標という問題は各々の時代に新しい形態をとるが、すべての形態の基礎に横たわる根本的な原理がある。すなわち、「進歩は、人間性の単に最高であるだけでなく最強の力が、どの程度まで社会善の増進のために利用されうるかということに主に依存する。」社会善が何であるかという問題はある。「社会善は、それが自尊心を支え希望によって支えられるものであるから、無条件に幸福を生む能力の健全な行使と発達のうち主に主にある」ということについては意見の一致がある (Marshall 1897, 310: 訳 243-4)。「幸福を生む能力の発達」はマーシャルが経済学に進む以前から考えていたことであった。

古代や中世の文芸の全盛期には、こうしたことを多少とも成功裏に行う方法を思いついていた。しかし、彼らの目標は幸運な少数者の福祉ということに限られた狭い範囲のものであった。今や過ぎ去ろうとしている社会科学の旧世代の研究者は、その問題をより広い基礎の上で取り扱おうとした。そして「新世代、あなた方の世代は、より大なる知識とより大なる資料をもってその仕事を続けていくことを要求されている。あなた方は、歴史とくに現代史の知識、分析と量的測定之力、空想と直観、本能と共感とを適用して、人間の努力の現在の無駄の生産物を人間的生産のために、自分のうちの喜びであり喜びの源であるような人間的生活の生産のために利用するという大きな仕事に向かうべく要求されている。将来にとって、過去も同様であったが、すべてのうちで最も主要な梃は希望であり、自分のためまた親しき人々のための希望である」(ibid. 310-11、訳 244-5、傍点は引用者)。

人間の努力による無駄の生産物を人間的生産のために、「自分のうちの喜びであり喜びの源であるような人間的生活の生産のために利用する」という仕事、というのはさながらラスキンを思い起こさせる。進歩は主に社会の福祉のために、人間性の最高の力だけでなく、最強の力を利用できる範囲に依存する。能力の健全な行使と発展こそが、幸福の源泉であり、社会の福祉は主にそれに依存するのであった。このような能力の行使と発展は自尊心を励まし、希望の念

によって励まされる。これは明らかに「効用」をベースにする人間像、効用だけを行動の基準とすることが合理的だという倫理観・人間像とは異なるものである。

最も重要な改良進歩というものは、金銭的利潤を生まずに何年もそのままになっていることがよくある。しかし、批判的で評価をする公衆は、金銭的利潤が実らなくても賢明で大胆な努力を賞嘆する。実際、「純粋科学は久しくその成功した研究に対して、非常に少数でも適切な公衆によって賞賛されてきたことから大いなる進歩力を引き出してきた。こういう賞賛は報酬であり、他のあらゆる報酬と同じように、人間性の要素に訴える。....しかし、その賞賛は報酬であるだけでなく共感でもある。共感は人間性の全体を通じて着実に作用する強固な力である。経済学者の来るべき世代は、できるだけ緻密な数量の評価をもってどの程度までこの種の力が私的な物的利益追求の粗野な力にとって代わるかを考察することよりも、緊急でおそらく愉快な仕事はないであろう」(ibid. 308-9、訳 241-2、傍点は引用者)。「人間性の全体を通じて作用する強固な力」が「私的な物的利益追求の粗野な力」にどの程度とって代わるか」を、「緻密な数量の評価」をもって考察することほど、来るべき経済学者の世代にとって緊急で愉快な仕事はないだろうというのが、マーシャルの大きなメッセージであった。これは、飛躍を恐れずに言えば、国民所得や GNP を超えた豊かさの指標を求めるメッセージであったようにも思われる。

「経済学者の旧世代と新世代」は次のように結ばれており、これはほぼそのまま『産業と商業』の最終章の「将来の可能性」で繰り返されている。ここには、「進歩と理想」を生涯の課題とした経済学的人間的要因に関わるマーシャルの思想の底流があるように思われる。

あなた方の世代は、過ぎ去った如何なる世代をも超えて、熱情に燃え、しかも批判的で分析的な心情をもって、協同と共感の力が、大きな企業内の expert officials の間に力強く作用し始めたように、どの程度一般の人々の間

に広がりうるかを研究するように要求されている。……あなた方の世代は、人々は生まれながらに平等ではなく、人為的に平等ならしめることもできないこと、また高貴でないある種の仕事がされねばならないことを知るだろう。しかし、増大する世界の知識と資源をもって、こういう仕事を狭い限界内に減少させ、生活条件を貶めるようなすべてのものをなくするように努めるだろう。人の生活条件の急激な改善は期待しないだろう。生活条件が人をつくるのと同じように人が生活条件をつくるのであり、人自身は急速には変化しないからである。しかし、あなた方の世代は、高貴な生活の機会がすべての人々に達しうるような遠い目的に向かって着実に推し進むであろう。(ibid. 311、訳 245-6)

参考文献

- Ashley, W. J. (1891) “The Rehabilitation of Ricardo”, *Economic Journal*, 1-3, 474-89.
- Bagehot, W. 1876 “The Postulates of English Political Economy”, No.1, *Fortnightly Review*, February 1, 1876, 215-42.
- Caldari, K. and Nishizawa, T. (2011) “Marshall’s Ideas on Progress: Roots and Diffusion”, in H. Kurz, T. Nishizawa, and K. Tribe eds., *The Dissemination of Economic Ideas*, Edward Elgar, 125-57.
- (2014) “Marshall’s ‘Welfare Economics’ and ‘Welfare’ : A Reappraisal Based on His Unpublished Manuscript on Progress”, *History of Economic Ideas*, XXII, 2014, 1, 51-67.
- (2015) “Progress Beyond Growth: Some Insights from Marshall’s Final Book”, *European Journal of the History of Economic Thought*, forthcoming.
- Hobson, J. A. (1929) *Wealth and Life. A Study in Values*. London: Macmillan.
- Hutchison, T. W. (1953) *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*. Oxford: Clarendon Press. 長守善・山田雄三・武藤光朗『近代経済学説史』上下, 東洋経済新報社, 1957年.
- Jones, Gareth Stedman (1971) *Outcast London. A Study in the Relationship between Classes in Victorian Society*, Oxford: Clarendon Press.

- Keynes, J. M. (1924) “Alfred Marshall, 1842-1924” in Pigou ed. (1925); *The Collected Writings of J. M. Keynes*, Vol. X, London: Macmillan, 1972. 大野忠男訳「アルフレッド・マーシャル」『ケインズ全集』第10巻、東洋経済新報社、1980年。
- Marshall, Alfred and Mary (1879) *The Economics of Industry*, with a new introduction by D. O'Brien. Bristol: Thoemmes Press, 1994. 橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部、1985年。
- Marshall, Alfred (1873) “The Future of the Working Classes,” in Pigou ed. 1925. 永澤越郎訳「労働階級の将来」、同訳『マーシャル経済論文集』岩波ブックサービスセンター、1991年。
- (1885a) “How far do Remediable Causes Influence Prejudicially (a) the Continuity of Employment, (b) the Rates of Wages?” in Industrial Remuneration Conference (1885), reprinted in *Alfred Marshall: Critical Responses*, ed. by P. Groenewegen, Vol.1, London: Routledge, 1998, 59-66.
- (1885b) “Theories and Facts about Wages,” (Reprinted from the *Annual of the Wholesale Co-operation Society* for 1885), reprinted in Groenewegen ed. op.cit., 68-79.
- (1885c) *The Present Position of Economics*, London: Macmillan, in Pigou ed. (1925). 坂垣与一訳「経済学の現状」、杉本栄一編『マーシャル経済学選集』日本評論社、1940年。
- (1885d) “Preface” to *The Postulates of English Political Economy* by the late Walter Bagehot, with a preface by Alfred Marshall. London: Longmans, Green, and Co.
- (1893) “Preliminary Statement and Evidence before the Royal Commission on the Aged Poor”, in Marshall (1926).
- (1897) “The Old Generation of Economists and the New,” in Pigou (ed.) (1925). 山田雄三訳「経済学者の旧世代と新世代」、杉本編『マーシャル経済学選集』所収。
- (1907) “Social Possibilities of Economic Chivalry”, in Pigou ed. (1925). 金巻賢字訳「経済騎士道の社会的可能性」、杉本編『マーシャル経済学選集』所収。
- (1919) *Industry and Trade. A Study of Industrial Technique and Business Organization; and of Their Influences on the Conditions of Various Classes and Nations*, London: Macmillan, 4th ed., 1923. 永澤越郎訳『産業と商業』I-III、岩波ブックセンター信山社、1986年。
- (1923) *Money, Credit & Commerce*, London: Macmillan. 永澤越郎訳『貨幣・信用・貿易』I-II、岩波ブックサービスセンター、1988年。

- (1926) *Official Papers by Alfred Marshall*, edited by J.M. Keynes, London: Macmillan.
- (1961a, 1961b) *Principles of Economics* (1890); 9th(variorum)ed., by C.W. Guillebaud, Vol.I Text, Vol.II Notes, London: Macmillan, 1961. 馬場啓之助訳『経済学原理』I-IV, 東洋経済新報社, 1965-67年.
- Parsons, T. (1932) “Wants and Activities in Marshall”, *Quarterly Journal of Economics*, 46-1.
- Pigou A.C. (1910) “Memorandum on Some Economic Aspects and Effects of Poor Law Relief”, *Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress*, Appendix Vol.IX. Cd.5068.
- (1924) “In Memoriam: Alfred Marshall”, (A lecture delivered in Cambridge on Oct. 24, 1924), in Pigou ed. (1925).
- ed. (1925) *Memorials of Alfred Marshall*, London: Macmillan.
- Ruskin, John (1860) *Unto this Last: Four Essays on the First Principles of Political Economy*, London: Routledge/Thoemmes Press. 飯塚一郎訳「この最後の者にも」『世界の名著』41「ラスキン、モリス」中央公論社、1971年.
- Whitaker, John K. ed. (1996) *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*, Cambridge: Cambridge University Press. (Vol. I Climbing, 1868-1890; Vol. II At the Summit, 1891-1902; Vol. III Towards the Close, 1903-1924).
- Winch, Donald (2009) *Wealth and Life. Essays on the intellectual history of political economy in Britain, 1848-1914*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 上田辰之助 (1987) 『上田辰之助著作集』2 『トマス・アクィナス研究』みすず書房.
- 尾高煌之助・西沢保編 (2010) 『回想の都留重人—資本主義、社会主義、そして環境』勁草書房.
- 塩野谷祐一 (2010) 「都留重人とシュンペーター」、尾高・西沢編 (2010)、48-73.
- (2012) 『ロマン主義の経済思想—芸術・倫理・歴史』東京大学出版会.
- (2013) 「福祉国家の哲学的基礎—オックスフォード・アプローチ」、西沢・小峯編 (2013)、187-223.
- 橋本昭一編 (1990) 『マーシャル経済学』ミネルヴァ書房.
- 西沢 保 (2007) 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店.
- (2013) 「創設期の厚生経済学と福祉国家—マーシャルにおける経済進歩と福祉」『経済研究』64-1、76-93.
- (2014) 「厚生経済学の源流 - マーシャル、ラスキン、福田徳三」『経済研究』65-2、97-112.
- (2015) 「イギリスにおける経済学史研究の形成、1870年代 - 1920年代」『経済学史研究』57-1、25-49.

西沢：マーシャルにおける経済学者の旧世代と新世代

西沢保・小峯敦編（2013）『創設期の厚生経済学と福祉国家』ミネルヴァ書房
福田徳三（1925-26）『経済学全集』全6集8冊、同文館